

論文の内容の要旨

論文題目 中世和歌表現史論——藤原定家を中心に

氏名 五月女 肇志

中世和歌表現の歴史は、その代表的な技法として本歌取が挙げられるように、先行作品の撰取の過程であるといえる。本論では、表現撰取を中心とした中世和歌の展開を、新古今時代を代表する歌人・藤原定家を中心に考察していく。冷泉家時雨亭叢書の刊行や、定家本の転写本である廣瀬本の公開による万葉古写本の系統分類など、近年著しい文献学的研究の進展や新資料の紹介を踏まえ、当該作品の本文はむろんのこと、撰取源となった本歌や本説の本文も再検討して、新たな解釈を導き出し、より精細な作品分析を行う。

三編からなる本論の具体的内容は、次の通りである。

第一編「中世和歌の物語撰取」は、中世の歌人達がどのように先行する王朝物語を撰取したかを中心に論じていく。俊成・定家を中心に、彼らが参看した物語本文を想定した上で、表現分析を進めていく。

第一章「藤原俊成自讃歌考」では、『千載集』秋上・二五九番歌の分析を中心にして、藤原俊成が開拓したとされる『伊勢物語』百二十三段の撰取を扱う。俊成詠の本歌となった『伊勢物語』と同じ贈答が収められる俊成本『古今和歌集』との本文比較から、俊成が物語の作中人物への共感を導き出した。本歌に対し、文献学的見地を生かした分析を加えることで、その撰取歌に新たな意義付けを示したのである。俊成自身の自詠への言及を分

析した上で、他の歌人達の物語摂取の姿勢が異なることを、指摘した。具体的には物語中の人物への共感の姿勢を示す俊成歌と、物語世界を相対化する他歌人との違いである。

第二章「藤原定家と『大和物語』——百六十九段・書きさしの物語の摂取をめぐって」では、中世歌人と『大和物語』、中でも書きさしの物語で歌が見られない百六十九段の摂取を中心に論じる。ここでも現存の資料を見る限り、藤原俊成が表現の素材としての『大和物語』百六十九段を見出し、後代の歌人達が継承したという現象を指摘することができるのである。同時に逢恋を詠んだ俊成と悲恋を詠んだ他歌人との物語摂取の相違点も明確となっている。

第三章「『藤河百首』考」では、藤原定家が難題に挑んだとされる『藤河百首』の表現について、『大和物語』に関する二つの本説を中心に、この百首に対する注釈書の和歌の解釈の妥当性について検証する。その上で、草野隆氏の定家仮託書説や五味文彦氏による新資料の紹介を踏まえ、その成立について再検討した。定家は何年もかけて百首題の集成を行い。それに従って歌を詠んだが、後鳥羽院の勘気に触れた歌と同じ表現が見られるため、後代までこの百首が長く秘されたとする推測を示した。

第四章「『建仁元年仙洞五十首』恋歌考——寄物題の表現性」では『源氏物語』『狭衣物語』の積極的な摂取が見られ、『新古今和歌集』の有力な撰集資料となった『建仁元年仙洞五十首』の恋歌について分析を行う。恋歌の全てが寄物題となっているこの定数歌について、独自の題である「寄嵐恋」「寄舟恋」の用例を中心に分析し、『六百番歌合』との比較も踏まえ、激しい動きへの志向が表現に見られることを指摘した。

第二編「万葉訓読史と中世和歌」では、近年著しく進展している『万葉集』訓読史の研究を踏まえ、中世を代表する二人の歌人源俊頼と藤原定家の万葉摂取を論じた。今日の訓読と異なる『万葉集』の訓を参看して、中世の歌人達がどのような発想を生み出したかを考察していく。今日の研究状況を前提にして、『万葉集』の誤読と断じるのではなく、作品創造の源泉として次点本万葉集の本文をとらえている。

第一章「源俊頼の万葉摂取歌——『恨躬恥運雑歌百首』を中心に」では、万葉集の訓読史の研究進展を踏まえて、源俊頼の『万葉集』摂取歌について考察する。万葉摂取の傾向が著しい『恨躬恥運雑歌百首』を中心に考察した。彼の舅藤原敦忠が編んだ『類聚古集』を中心とする非仙覚本万葉集の訓読の影響を俊頼がどのように受けたかを分析した。『万葉集』の本文や解釈に必ずしも拘泥せず、創作者としての立場から歌の表現を選んでいる俊頼の独自性にも言及している。

第二章「二つの「定家本」——国立国会図書館蔵『俊頼髓脳』と廣瀬本万葉集」では、源俊頼が著わした歌論書『俊頼髓脳』所収の万葉歌の本文について考察する。定家と俊頼の万葉歌本文に対する見解の相違を示す資料といえる定家本『俊頼髓脳』について、先学の指摘にも拠りながら、廣瀬本を中心とする非仙覚本『万葉集』との本文比較を行った。定家本『俊頼髓脳』所引の万葉歌は、定家が、俊頼によって歌に付された注説を検討した上で、校訂しても支障がないと判断した際に、『万葉集』を参看して改められたことを指摘した。

第三章「藤原定家『百人一首』自撰歌考——万葉撰取を中心に——」では、定家の代表的な女人仮託歌である『百人一首』自撰歌を中心に次点本万葉歌本文から定家が何を撰取したかについて考えて行く。従来の解釈は、今日の『万葉集』自体の研究を踏まえ、新古今時代には見られない賀茂真淵提唱の万葉本文に従って、定家の方法を論じているが、本章ではこの歌を中心に定家の万葉撰取の方法を次点本本文との関わりから言及した。さらにこの自撰歌と関わりの深い順徳院への思いが、父俊成を見出した崇徳院に対する意識と重なることを、歌合判詞など現存する資料を基に示した。

第三編「藤原定家関連資料の分析——本文批判・改作」では、藤原定家の家集『拾遺愚草』・彼が単独撰者となった『新勅撰集』・彼が判者を務めた『宮河歌合』・彼が設題に大きな役割を果たし自らも出詠した『内裏名所百首』を取り上げ、現存する定家関係の資料の本文や奥書分析から見出される、和歌の改作や表現の位相差などの問題を考察した。

第一章「『宮河歌合』考」では、『宮河歌合』について稿者が把握している諸本・古筆切を挙げ、そこから生ずる解釈上の問題について考察した。一番右歌に対する判詞に中世神話を読みとるべきかを検討し、三十二番の二首に見られる西行の自負心と、判詞からうかがえる定家の崇徳院への畏怖を指摘した。

第二章「藤原定家の自詠改作」では近年国宝に指定された藤原定家自筆の冷泉家時雨亭文庫蔵『拾遺愚草』本文と定家の初出稿とも言える『千五百番歌合』本文との明らかな相違から生ずる和歌の解釈上の問題点について論じた。家集編纂に際して認められる定家の自詠への改作を扱っている。近年盛んに議論されている「女の歌」についての言及が見られる定家の自詠に対する判詞を分析し、「女の歌」とは、身近な景物へ作中主体の視線を限定する傾向を持つことを指摘した。題詠の詠みぶりが強く求められた当時の和歌において、そこから逸脱するものとして認識されていたことも指摘している。

第三章「帝の歌——『内裏名所百首』の順徳院詠をめぐって」では、藤原定家が出詠し

た順徳院歌壇における代表的な催事である『内裏名所百首』の「霞浦」題の順徳院詠を中心に、本文異同の問題を考察する。この百首の諸本と、順徳天皇・藤原定家・家隆の三人の歌を抄出し注釈を加えた三人本有注本所引の和歌とで異なる本文が存在することに着目し、三人本有注本の本文は、三歌人の独自の表現を和歌史における頻用表現や、本歌により近い表現に改めるという結果になっていることを、用例分析を踏まえて指摘した。さらに『後拾遺集』の後朱雀天皇詠を本歌取した順徳天皇の和歌の位相差への意識を指摘した。

第四章「『新勅撰和歌集』の本文形成——『万葉集』『散木奇歌集』『殷富門院大輔集』の改作」では、『新勅撰集』編纂にあたって出典歌集本文を定家が改作した際の表現意識を、『万葉集』『散木奇歌集』『殷富門院大輔集』を出典とする和歌について考察した。冷泉家時雨亭文庫蔵の私家集・定家の歌学書『五代簡要』、廣瀬本万葉集の影印刊行を踏まえ、他人の作品を改作するという行為について分析を加えている。『新勅撰集』入集にあたっての改作は、定家の歌人としての創作意識からくるものであることを一首一首の和歌について詳説した。定家の改作は、出典となった和歌の表現をより生かすために行われたものであることを指摘した。

附編「『明月記』写本研究では、必ずしも和歌の表現分析に直接関わる文献ではないが、歌人定家の伝記資料として重要な『明月記』六本について調査・分析した。

第一章「東京大学総合図書館蔵『明月記』の研究」では、東京大学総合図書館蔵『明月記』のうち、姉小路家旧蔵青洲文庫本及び三十三冊本の二本について考察し、その伝来について推定を加えた。姉小路家旧蔵青洲文庫本は、姉小路家の本三十一冊と、冷泉家の協力で書写されたものを補充した二十四冊からなることを指摘し、同図書館蔵野宮本の中に一冊だけ含まれる姉小路家旧蔵の本についても考察した。また、三十三冊本についての奥書を分析し、流布本として位置づけられることを述べた。

第二章「国立国会図書館所蔵『明月記』研究」では、国立国会図書館蔵『明月記』四本の書誌調査を報告し、柏原正康の書写活動、高崎藩校及び松平定信が所蔵した本の伝来、自筆本欠損部分に対する対校本としての意義が見出せる写本の存在について報告した。

以上の考察を踏まえ、文献学的知見を十二分に生かした上で、一首一首の読みに還元していく作品論を展開し、歌人の表現意図を探り出す本論独自の姿勢が示せたと考える。